様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２２９０

研究課題名（和文）ロマン主義時代の英国小説に見られるインド表象

研究課題名（英文）Representation of India in British Romantic Novels

研究代表者
鈴木　美津子（Suzuki, Mitsuko）

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：６００７３３１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、従来あまり論じられることのなかったロマン主義時代のいわゆる「インド物語」(イギリスの植民地支配下にあるインド亜大陸を舞台にした作品)を、 当時の文化的、政治的、宗教的文脈の中に位置づけた上で、個々の作品に見られるインド表象がいかなるものかを検証した。次いで、作家の宗教意識、政治意識、民族意識を、東洋学者Sir William Jones、保守の論客Edmund Burke 、歴史家Robert Orme、紀行文作家William Hodgesの著作等を中心に、一次資料を援用しながら、インド表象の特色をポストコロニアリズム、 フェミニズム、 新歴史主義の観点から分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
Robert SoutheyやThomas Moore等のロマン主義時代の男性詩人の作品に見られるインド表象の研究は比較的進んでいるが、同時代の女性作家の手になるインド物語の研究は、端緒に就いたばかりである。本研究の学術的特色は、女性作家の多種多様な作品において、いかにインドが表象されているのかを、当時の様々な言説を援用しながら、文化横断的に分析することにある。さらには、ロマン主義時代に構築されたインド物語がヴィクトリア朝時代の小説に対して小説の準拠枠を提供する様を検証し、19世紀の錯綜する小説群にある種の見取り図を提示しようとする本研究の試みは、学術的に意義あることのように思われる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present research project is to illustrate how British India is represented in the Indian tales, such as Phebe Gibbes' Hartly House, Calcutta (1789), Sydney Owenson's The Missionary (1811), Sir Walter Scott's The Surgeon's Daughter (1827) and others. First, I located the Indian tales within the context of politics, culture, and religion at the end of the eighteenth and the beginning of the nineteenth centuries. Second, I examined the way the Indian subcontinent was represented in the Indian tales, in the light of imperialism, domination, and colonialism. Third, I investigated writers' political purposes latent in their works, for which their representation of India provided clues. Further, I tried to make it clear that the Indian tales in the Romantic age exerted a great influence over Victorian novelists. By doing so, I showed that the Indian tales in the Romantic age provided Victorian novelists with themes, plots, and underlying structures for their novels.

研究分野：英米文学

キーワード：ウィリアム・ジョーンズ　ロマン主義時代の英国小説　エドマンド・バーク　ウォレン・ヘイスティングズ　東インド会社　ネイボブ　植民地支配　エリザベス・ハミルトン

１．研究開始当初の背景

（1）本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけは、次の通りである。ロマン主義時代の文学作品に見られるインド表象を考察した論考は、扱う対象が男性詩人による詩作品であるものが大部分であった。インド亜大陸を舞台にした小説、いわゆる「インド物語」（Indian tale）を論じている著作、論文は数えるほどしかなかった。Balachandra Rajan の *Under Western Eyes*（1999）は、Robert Southey、Percy Bysshe Shelley のインド観、インド表象を丁寧に分析した力作であるが、Sydney Owenson、Phebe Gibbes、Elizabeth Hamilton の小説に関しては十分に議論がし尽くされているとは言い難い。Nigel Leask の *British Romantic Writings and the East* (1992)は、Lord Byron、Shelley、Thomas De Quincey、Samuel Taylor Coleridge などの詩作品に見られるインド、中国、極東などの東洋表象を分析した刺激的な論考であるが、Shelley との比較のために取り上げられた Owenson の *The Missionary*（1811）に関しては、議論が散発的で不満が残った。主に、Coleridge、Shelley、E. M. Forster を論じた John Drew の *India and the Romantic Imagination* (1998) は、Sir William Jones の Owenson に対する影響を丁寧に跡付けており、本研究にとって有益であるが、インド表象に関してはまとまった議論はなされていない。Michael J. Franklin 編の *Romantic Representations of British India* (2007) には、刺激的な Hamilton 論と Owenson 論が収録されており、本研究にとって重要な文献の一つであるが、ロマン主義時代のインド物語を包括的に論じてはいない。Tara Ghoshal Wallace の *Imperial Characters* (2010)は、主眼を Daniel Defoe、Tobias Smollett 等の 18 世紀作品の分析においているが、Hamilton と Scott のインド物語にもそれぞれ一章を割いており、刺激的な考察は本研究に示唆するところが大きかった。国内では、応募者の研究発表、論文以外には、本研究のテーマを包括的に扱った論文はまだ出ていない。

（2）これまでの研究成果、着想に至った経緯は、次の通りである。「ロマン主義時代における国民小説の誕生とその変容」という研究課題でロマン主義時代に構築された歴史小説、国民小説の成立過程の分析に取り組んでいた際に、インドを舞台にした歴史小説、国民小説に出会い、多様なインド表象がなされていることに興味を引かれたのが、本研究の萌芽と言える。ここ数年、本研究の準備段階として二つの研究発表を行った。一つは「ヘースティングズ裁判とロマン主義時代の女性作家」（日本英文学会第 86 回大会招待発表、2014 年 5 月）であり、この発表では、Gibbes と Hamilton のインド物語を取り上げ、この両作品のインド表象を分析することによって、弾劾裁判（1788-95）に付せられた Warren Hastings を擁護するという政治的目的をもった作品であると結論づけた。もう一つは、「異国への旅―ロマン主義時代の英国小説を中心に」（片平会 50 周年記念大会招待講演、2014 年 8 月）であり、Owenson と Scott のインド表象の違いは、両者の政治意識の相違に起因することを指摘した。さらには、応募時点で、次の二つの論文を発表している。「スコットの『外科医の娘』に描かれた危険な他者としてのインド亜大陸」（『試論』第 48 集、2013）においては、保守主義者 Scott の歴史小説 *The Surgeon's Daughter* (1827) を取り上げ、この作品が歴史小説の枠組みを利用して、自己の政治意識に合致したインド表象を行っている様を検証した。また、「シドニー・オーエンソンの『宣教師』におけるインド表象」（『揺るぎなき信念』、2012）においては、筋金入りの急進主義者 Owenson がインドを舞台にした国民小説 *The Missionary: An Indian Tale* (1811)において、イギリスのインドに対する帝国主義的文化介入政策の非道さを描きながら、実は水面下で、19 世紀初頭のイギリスの植民地支配下にあるアイルランドの窮状をも訴えていたことを論じた。

２．研究の目的

（1）本研究の目的は、従来あまり論じられることのなかった Elizabeth Inchbald、Maria Edgeworth、Gibbes、Owenson、Hamilton、Scott などのインド物語を取り上げ、これらの作品をロマン主義時代の文化的、政治的、宗教的な文脈の中に位置づけ、個々の作品に見られるインド表象がいかなるものなのかを検証することである。次に作家の宗教意識、政治意識、民族意識などを東洋学者 Jones、保守の論客 Edmund Burke、歴史家 Robert Orme などの著作や William Hodges の旅行記などさまざまな文献を援用しながら、ポストコロニアリズム、フェミニズム、新歴史主義などの観点から分析する。そうすることによって、各作品に見られるインド表象が何に起因するのかを明らかにすることを目指した。

（2）18 世紀末から 19 世紀にかけてのイギリスにおいて、Hastings の弾劾裁判、ヴェロールの叛乱（1806）、ネイボブ（インド帰りの成金）問題、インドにおけるキリスト教の宣教の是非など、インドを巡ってさまざまな議論が巻き起こっていた。とくに、Hastings の弾劾裁判やインドにおける宣教問題は、当時大変な関心を集め、詩、小説、戯曲、政治論文、雑誌記事、James Gillray の諷刺画などにおいて取り上げられ、盛んに議論がなされた。一例を挙げれば、Gibbes と Hamilton は、それぞれのインド物語において、帝国主義賞賛の立場から Hastings を、大英帝国建設の最大の功労者として擁護した。Owenson は、*The Missionary* において、多文化が共存する豊かなインドを描き、インドでの宣教に文化的帝国主義を嗅ぎ取り、警鐘を鳴らし、Scott は *The Surgeon's Daughter* において、インドを危険な他者として表象し、インド亜大陸からイギリスに悪、腐敗、堕落を持ち込むネイボブに対して、不安と懸念を表明した。本研究では、当時の、インド旅行記、歴史書、政治評論など多様な言説を援用しながら、インド物語に見られ

るインド表象を仔細に分析することによって、作家の政治意識、宗教意識、民族意識を明確にすることを試みた。さらに、従来等閑視されてきた Owenson、Gibbes、Inchbald などの女性作家のインド物語を取り上げ、Robert Southey 、Thomas Moore、Scott 等の同時代の男性作家の作品と比較検討しながら、インド物語という新たな小説ジャンル構築に女性作家が多大なる貢献をしたことを跡付けることを目指した。

（3）本研究の主眼の一つは、インド物語を手がけた作家の政治意識、宗教意識の解明である。作品におけるインド表象は、作家の抱く政治信条に色濃く影響されていると推測するからである。インドを舞台にした小説の嚆矢とされる Gibbes の *Hartly House, Calcutta* (1789)を初め、Hamilton の *Translation of the Letters of a Hindoo Rajah*、Owenson の *The Missionary*、Scott の *The Surgeon's Daughter* に見られるインド表象、さらには作家の政治意識に関しては、本課題研究の応募時点では、ある程度分析を終えていたが、よりいっそう深化させる必要があった。それぞれの特徴を際立たせるために、スコットランド人の Hamilton と Scott、アイルランド人の Owenson、Moore、Edgeworth などのそれぞれの政治意識、宗教意識、民族意識の分析をよりいっそう周到におこなうことに努めた。一方、Robert Bage、Martha Sherwood、Elizabeth Inchbald 等の作品に潜む政治意識、民族意識に関する考察は、手をつけたばかりであった。そこで、Edgeworth や Owenson などのインド物語を解明して得た知見を援用して、Bage、Sherwood、Inchbald 等の小説に見られるインド表象を分析し、政治意識などの考察を進めることにした。そして、William Makepeace Thackeray、Elizabeth Gaskell などを初めとするヴィクトリア朝時代の作家にインド物語の枠組み、プロット、道具立て、文学手法などがいかに継承され、変容されたのかを検証し、その過程で彼らの政治意識、宗教意識、民族意識などを浮き彫りにすることを目指した。

３．研究の方法

（1)作品中でインドが重要な位置を占めるロマン主義時代の小説および当時盛んに刊行されたインド関連図書は、現在ほとんどが絶版状態になっており、入手不可能であった。そこで、平成 27 年度、28 年度は、Robert Bage, *Mount Henneth* (1782); Robert Bage, *The Fair Sicilian* (1787); Charles Hamilton, *Hedaya or Guide: A Commentary on the Musslman Laws* (1791); Mariana Starke, *The Widow of Malabar* (1791); Alexander Dow, *The History of Hindostan, Translated from Persian* (1792); Martha Sherwood, *The History of George Desmond* (1821); Mathew Gregory Lewis, *The Anaconda: An East Indian Tale* (1813); などの文献を、大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、オックスフォード大学図書館などから、マイクロ・フィルムや、フォート・コピーの形で取り寄せた。

（2）取り寄せたマイクロ・フィルムを現像し、製本し、読みやすい形にした。

（3）製本した作品を精読し、分析結果をカードの取り、必要に応じてコンピューターにデータを入力した。

（4）インド物語に潜む政治性を炙り出すために、同時代に刊行された歴史書、旅行記、政治論文などを多数入手し、精読した。

（5）最終年度の平成 30 年度は、平成 27 年度、28 年度、29 年度に得た成果をもとにして、ロマン主義時代に刊行されたインドを舞台にした小説が、ヴィクトリア朝時代においていかなる変容を遂げたのか、インド物語の発展、変容に作家の政治意識がいかに関わったのか、そのプロセスを明確化し、最終的には 19 世紀の錯綜した小説群に、ある種の見取り図を提示することを試みた。

（6）以上の成果を、「中東」表象研究会、イギリス・ロマン派学会、オースティン協会などで発表し、その後論文にまとめて公表した。

４．研究成果

（1）第一に、ロマン主義時代に刊行されたインド物語のうち、Owenson、Scott、Hamilton の作品は応募時点で考察を終えていた。そこで、まだ論じていなかった Fanny Burney、Gibbes、Bage、Inchbald、Edgeworth などの作品を取り上げ、それぞれの作品をロマン主義時代の文化的、政治的、宗教的な文脈の中に位置づけ、各作品の中に見られるインド表象の特徴を明確化した。次に、個々の作品に見られるインド表象が何に起因するのかを明らかにした。得た知見の一端は、以下 5 篇の論文にまとめた。①「ロバート・ベイジの『美しきシリアの人』に見られる異国表象―北アメリカ植民地、アイルランド、フランス、そしてオスマン帝国」（2019 年）においては、Bage の *The Fair Syrian* (1787)を取り上げた。この作品では、主に描かれているのはインドと同様にイギリスの植民地支配下にある北アメリカ植民地とアイルランドであるが、インドに関する言及もなされている。当時、イギリスではインド行政を巡って論争が巻き起こっていたことに、Bage は敏感に反応し、きわめてさりげなく、過酷なインド統治に対する批判を行っていることを指摘した。②「ギャスケルとディズレイリ―スコットの影のもとに」（2018 年）においては、ヴィクトリア朝時代の作家 Gaskell の *North and South* (1855)と Benjamin Disraeli の *Sybil* (1845)を取り上げ、プロット展開や作品の枠組みを分析することによって、これら二作品がロマン主義時代に構築された国民小説の特徴をもった作品であることを指摘し、その影響源は Scott であることを跡づけた。③「偽装と隠蔽、混乱と錯綜―『フロレンス・マカーシー』

に見られるアイルランド表象」（2017 年）においては、Owenson の長編小説 *Florence Macarthy: An Irish Tale* (1818)を取り上げた。Owenson が、この作品において、インドと同じくイギリスの植民地支配下にあるアイルランドを、偽装と隠蔽が横行し混乱と錯綜によって今にも転覆しかねない国として表象したことを跡づけた。④「フィービ・ギブズの『カルカッタのハートリー館』とヘースティングズ弾劾裁判」（2017 年）においては、Gibbes の *Hartly House, Calcutta* を分析した。この作品において、東洋学者 Jones の見解を色濃く反映させて、インドは資源豊かで明るく豪奢な国として、東インド会社総督 Hastings は質実剛健で聡明な東洋学者、有能な植民地行政官として表象されていることを検証した。*Hartly House, Calcutta* には、東インド会社の業績を賞賛し、当時弾劾裁判にかけられていた Hastings のインド統治を高く評価し、彼を擁護しようとする政治的な意図が潜められていたということを指摘した。⑤「ファニー・バーニーの戯曲『忙しい一日』とヘースティングズ弾劾裁判」（2016 年）では、Burney の戯曲 *A Busy Day*（1801）を取り上げた。Burney は、この作品において、インドを高潔、温和、寛容、豊穣の場所として肯定的に表象し、Hastings をその代表とするネイボブや東インド会社社員を含めた商業階級の大英帝国への貢献を賞賛することによって、弾劾裁判において Burke によって貶められた Hastings の名誉挽回を図ろうとしたと指摘した。

研究発表に関しては、以下 6 回行った。①「ロバート・ベイジの『ヘネス山』に見られる異国表象―インド亜大陸と北アメリカ植民地」（2019）においては、Bage の *Mount Henneth* (1782)を取り上げた。*Mount Henneth* の第一巻の三分の一を占める部分では、主人公の一人フォストン氏の英領インドでの精神的成長が描かれている。フォストン氏は、若き日に東インド会社に入社し、インド亜大陸に出かけ、寛容で温和で学識豊かなヒンドゥー人司祭と出会い、彼の薫陶を受けて賢明で慈愛に満ち洞察力に富む人間へと成長する。Bage は、この作品において、過酷な植民地政策を糾弾し、宗教的寛容を唱え、啓蒙主義や自由主義に立脚した政治信条を間接的に表明しているということを指摘した。②「マライア・エッジワースの『足の不自由なジャーヴァス』に見られるインド表象」（2018）においては、Edgeworth の *The Popular Tales* (1804) 所収の中編“Lame Jervas”を取り上げた。この中編小説では、ムガール帝国・大英帝国に支配されているインドと大英帝国に併合されたアイルランドが重ね合わされている。Edgeworth は、この作品において、父親譲りの保守党支持者らしく大英帝国の植民地支配を正当化しており、アイルランドの庶民はアングロ・アイリッシュの支配階級に刃向かって革命を起こしてはいけないという政治的メッセージを発していることを跡付けた。③「エリザベス・インチボールドの『そういったもの』に見られるインド表象」（2016）では、東インド諸島のスマトラを舞台にした Inchbald の戯曲 *Such Things Are* (1787)を取り上げた。この戯曲においては、Hastings を想起させるフリント卿は、策謀家、自惚れ屋、虚偽的な人間として描かれている。一方、スルタン、看守、政治犯などの東インド諸島出身の登場人物はおしなべて、知的、冷徹、賢明、誠実な人物として表象されている。Inchbald は、Burke に共感を抱いており、東インド会社、ネイボブ、Hastings に対して政治的な不信感を抱いていることが窺われると結論づけた。④「エリザベス・インチボールドの『ムガール帝国の物語』に見られるインド表象」（2016）においては、Inchbald の戯曲 *The Mogul Tale: or, The Descent of the Balloon* (1784)を取り上げた。Inchbald は、この戯曲において、ムガール帝国とイギリスを重ね合わせ、東インド会社の統治問題と Charles James Fox が提議したインド法案の廃案を巡って揺れ動いていた当時のイギリスの政治情勢を諷刺していることを跡づけた。さらに、ムガール帝国の皇帝は、啓蒙、明晰、理性と表象することにより、当時のイギリス国王 George III の強権政治が炙り出されていることを指摘した⑤「『フロレンス・マカーシー』に見られるアイルランド表象」（2015）は、論文③の基になったものであり、内容は上述の通りである。⑥「ファニー・バーニーの『忙しい一日』とヘースティングズ弾劾裁判」（2015）は論文⑤の基になったものであり、内容は上述の通りである。

（2）今後の展望としては、以下の通りである。本研究課題の遂行過程において、Warren Hastings の弾劾裁判が、ロマン主義時代の小説家がインドを表象する際に、きわめて強い影響を与えていたということにあらためて気づかされた。そこで、Hastings の弾劾裁判がインド物語に及ぼした影響を検証した際の知見を活かして、Hastings の弾劾裁判が、小説以外のジャンル、たとえば、ロマン主義時代の戯曲に対していかなる影響を与えたのかということを、James Gillray や Thomas Rolandson 等の戯画も参照しつつ、探ってみたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 鈴木美津子、「ロバート・ベイジの『美しきシリアの人』に見られる異国表象―北アメリカ植民地、アイルランド、フランス、そしてオスマン帝国」、『英国小説研究』第 27 冊、英宝社、2019 年 5 月刊行予定、査読無。

② 鈴木美津子、「フィービ・ギブズの『カルカッタのハートリー館』とヘースティングズ弾劾裁判」、『英国小説研究』第 26 冊、英宝社、2017 年 4 月、32-54、査読無。

③ 鈴木美津子、「ファニー・バーニーの戯曲『忙しい一日』とヘースティングズ弾劾裁判」、

『ジェイン・オースティン研究』第 10 号、2016 年 6 月、86-98、査読有。

〔学会発表〕（計 6 件）
① 鈴木美津子、「ロバート・ベイジの『ヘネス山』に見られる異国表象―インド亜大陸と北アメリカ植民地」第 77 回「中東」表象研究会、2019 年 3 月 27 日、東北大学。

② 鈴木美津子、「マライア・エッジワースの『足の不自由なジャーヴァス』に見られるインド表象」、第 71 回「中東」表象研究会、2018 年３月 7 日、東北大学。

③ 鈴木美津子、「エリザベス・インチボールドの『そういったもの』に見られるインド表象」第 64 回「中東」表象研究会、2016 年 11 月 30 日、東北大学。

④ 鈴木美津子、「エリザベス・インチボールドの『ムガール帝国の物語』に見られるインド表象」第 58 回「中東」表象研究会、2016 年 2 月 16 日、東北大学。

⑤ 鈴木美津子、「『フロレンス・マカーシー』に見られるアイルランド表象」、イギリス・ロマン派学会第 41 回全国大会、シンポジウム「アイルランドとロマン主義―「国民国家」と文学」、2015 年 10 月 18 日、奈良教育大学。

⑥ 鈴木美津子、「ファニー・バーニーの『忙しい一日』とヘースティングズ弾劾裁判」、オースティン協会第 9 回大会、シンポジウム「「英国」ロマン主義とインド表象」、フェリス女学院大学、2015 年 6 月 27 日。

〔図書〕（計 2 件）
① 鈴木美津子、大野龍浩、松岡光治、木村晶子、鈴江璋子、石塚裕子他 20 名 8 番目、「ギャスケルとディズレイリ―スコットの影のもとに」、『比較で照らすギャスケル文学』、大阪教育図書、2018 年、総ページ数 288 ページ（担当 99-112）、査読有。

② 鈴木美津子、三馬志伸、塩谷清人、海老根宏、高桑晴子、新井潤美、小川君代他 19 名 18 番目、「偽装と隠蔽、混乱と錯綜―『フロレンス・マカーシー』に見られるアイルランド表象」、『ジェイン・オースティン研究の今』、彩流社、2017 年 4 月、総ページ数 382＋xiv ページ（担当 337-55）、査読有。